

第7講 大学と地域の協働について

講師●本橋 明彦 氏 (相模女子大学教育研究推進課 課長)

2015年4月20日(月) PM7:00~9:00 春の嵐の夜。本橋さん、参加者のみなさん、悪天候のなかの参加、お疲れ様でした。

大野南公民館 コミュニティー室

【資料】「相模女子大学の地域貢献活動」 ※ユニコムプラザにて、いつでも入手可です。

<参加者7名(講師除く)/講義録まとめ 田嶋いづみ

【講義の概要】

現職に就く前までの本橋さんは、相模原市役所で勤務。パートナーシップ推進課(当時)に、市民活動サポートセンターができてから5年間在籍し、モデル事業に携わってきた。(豊町の公園づくりなど)そして、大学に移ってきて5年目になる。地域のことを考えることを仕事でしてきたが、ずっと地域のことや大学との連携のことを考えたいと大学に移ることになった。主な仕事としては、地域連携や産学連携の企画・運営、教員の研究支援、公開講座の開催や聴講生制度の周知など生涯学習機会の提供など、地域との連携をはかって、教員レベルから大学レベルまでの様々な連携を進めている。

相模女子大学は、女子大としてやっていくことを定め、学科についても見直しを行い、社会マネジメント学科など10学科を再編。2008年に新設された社会マネジメント学科は、地域社会におけるマネジメントを担える人材の育成にフォーカスした学科として開設された。今の大学教育は、自分たちが受けた昔とは違う。少人数で演習を行い、アクティブ・ラーニングを中心として様々な課外活動の機会を提供し、大学の内側だけにとどまらないというのが、「いまふう」の学びとなっている。すなわち、相模原市役所に勤めていたころは、正直、「相模女子大学はもっと地域に開かれた大学になってほしい」と思ってきたが、大学自体が地域に目を向けてきたのである。

大学の役割は何かといえば、教育と研究に加えて社会貢献という役割がある。大学施設の貸出(=教室や体育施設等の貸出など)という地域貢献もあり、相模原市教育委員会との連携による相模女子大学発祥の「市民大学」は、今年(平成27年)で50周年の歴史がある。そもそも、1900年に創立した大学で、前身は、帝国女子専門学校。学内にフランス庭園や歴史的建造物である旧校舎をかかえ、この旧校舎を教室として行う「さがみアカデミー」は評判もよく、意義あるものと思う。

その上で、地域協働活動が考えられている。「農村(いなか)で働く」という教育変革の課題のなかのプロジェクトにのかったというのが始まりだった。女子大で農業体験をしてみるという連携で、自治体が相手となる。大学がオーナーになっている田圃のある三重県熊野市の棚田でスタートし、社会マネジメント学科で取り組むようになって、いまや、主な派遣地は、福島県本宮市、三重県熊野市、京都府和束町、新潟県佐渡市と拡がり、全学生を対象に募集している。この活動は基本的には課外活動として位置づけており、単位取得を目的とした活動ではないことを前提とし、あくまでも学生の自主性・主体性を重視した活動となっている。(希望する学生には4年間で1単位のみ認定あり)最近では複数回応募・参加したり、主体的に現地を訪問したりする学生も現れた。相模女子大は農学部があるわけではなく、「農業を学ぶ」というのではなく、地域を体験することによって、自分のこれからの選択、生き方を考える学生となってほしいということである。また、地域に学生を送り込んで終わる、というだけでなく、たとえば、学園祭である相生祭において、地域物産展を開催することになった。地域をつたえながら商品を販売する、さらに、地域の方に大学に来てもらって学生と一緒に販売してもらう。販売してみるというのは、商品開発につながり、マーケティングを考察する機会にもなる。地域物産展への出展者は18~19の地域の拡がりを果たして、相生祭の目玉にもなっており、この催しから発展した「相模女子大学地域交流フェア(小田急百貨店町田店地下食品売場)を実現するようになった。学生にとっては、対面販売をする貴重な機会にもなっている。



学生たちの活躍の場は日本全国、そして世界に広がっています。

相模女子大学は、日本全国・地域での積極的な展開を続けています。

地域貢献活動ランキング 全国女子大学 4年連続第1位! 4年連続受賞!

フードアクション フォーワード 2011~2014 4年連続受賞!

学生たちは、日本全国・地域での積極的な展開を続けています。

1. 北海道 北海道産物説明会 北海道産物説明会 北海道産物説明会

2. 新潟県 新潟県産物説明会 新潟県産物説明会 新潟県産物説明会

3. 茨城県 茨城県産物説明会 茨城県産物説明会 茨城県産物説明会

4. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

5. 三重県 三重県産物説明会 三重県産物説明会 三重県産物説明会

6. 京都府 京都府産物説明会 京都府産物説明会 京都府産物説明会

7. 福島県 福島県産物説明会 福島県産物説明会 福島県産物説明会

8. 神奈川県 神奈川県産物説明会 神奈川県産物説明会 神奈川県産物説明会

9. 千葉県 千葉県産物説明会 千葉県産物説明会 千葉県産物説明会

10. 埼玉県 埼玉県産物説明会 埼玉県産物説明会 埼玉県産物説明会

11. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

12. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

13. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

14. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

15. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

16. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

17. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

18. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

19. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

20. 東京都 東京都産物説明会 東京都産物説明会 東京都産物説明会

現在、主な派遣自治体として大船渡市、本宮市、熊野市、和束町、佐渡市(上図参照)となるほか、相模原市がボランティア認定制度をつくり、市民協働事業(吉野宿ふじや活性化事業など、次ページ図参照)へのボランティア参加の呼びかけには市民協働推進課が説明に来て、学生のボランティアに関する関心をかき立ててくれている。そのほか、大和市や相模原市におけるインターンシップ、株式会社サガミチェーン(名古屋市)やノジマステラ神奈川相模原との連携事業など、それぞれの連携協定をもとに様々な連携の形がある。

学生が自主的に行っている活動も生まれている。「こども用車椅子を届けよう」(成長とともに使えなくなる車椅子を集め、整備し、バザーなどで配送費を工面して、海外に送り出す)、「大船渡の復興支援ボランティア」(仮設住宅訪問や地元の食材を使った海鮮キッシュなどの新商品づくり)など。

市民活動との連携としては、NPO 法人らいぶらいいとの共催による講演会を行ったり、スペシャルオリンピックス日本・神奈川との連携による学内のテニスコートを使った「障害者テニス教室」の実施、地域住民との連携による「相模大野こどものまち」の開催に向けた支援(会場提供・学生ボランティアの募集等)を行っている。

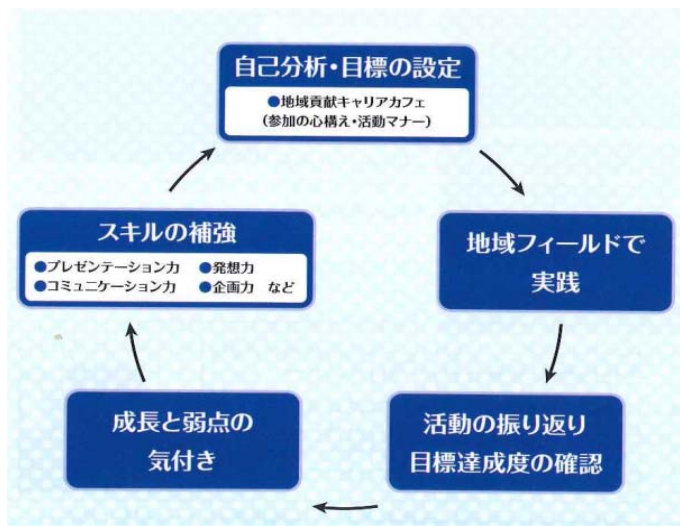
相模原市ボランティア認定制度

ボランティア活動が認定されました

本学と相模原市との包括連携協定に基づき、平成26年度から相模原市・市民活動ボランティア認定制度が創設されました。
この制度は、公益的な活動に積極的に参加し、地域住民の福祉の増進及び市民生活の向上に貢献した学生に対し、認定証が贈呈されます。
2014年度は、参加した9名の学生が認定され、相模原市役所で行われた贈呈式で認定証が授与されました。

平成26年度活動事例

- 吉野宿ふじや活性化事業
- 銀河の森プレパーク事業
- 子育てサロン事業
- 音風景事業



【意見交換、あるいは質疑応答のなかから】 (連携はどこから生まれるか)

・連携を考えると、これまでは教員によるきっかけが多かった。いわば窓口というものがなかったわけで、それが社会連携推進室で受け止めている。そこで閉鎖的な大学ではなく、「見える化」をはかるというも、これからの大学の役割かな、と。学生と地域に派遣する取組みは、具体的には農水省の呼びかけをきっかけとしてスタートすることになった。

・連携の協定を結んでいるのは、事業の継続性の保証として行っている。学生にとってのメリット、何が学べるかということの保証となる。

・最近まで「地域との連携」といわれても、学びが大学のなかで完結していたので、具体的なイメージがなかった。何をしたいのかわからない、ということだったと思う。たとえば、広島大学における博報堂の関与もそれを表しているのでは。

〈社会連携を体験することは、学生にとってどのようなことなのか〉

- ・パンフにある自己分析から始まる図に感銘を受けた(上の図)、地域の協働は、人間理解に通じるものとしての位置づけがわかる。
- ・ボランティア体験を経て、本宮市役所に就職した学生がいる。ボランティアした地域・活動に戻らないにしても、地域におけるパートナーシップを学ぶ機会を得て、社会に出る前の成人期にある学生にとって、生き方や人生の選択を考える機会になることを望んでいる。
- ・ボランティアや社会貢献活動は、自己発見・自己実現のための大切なきっかけと考えている。相模原市が創設した「ボランティア認定制度」では、一定時間の活動に参加した学生に対して市長から認定証が授与される。

【まとめ(感想)のひとつ】

これまでの市民活動体験のなかで、大学との連携のハードルの高さを強く実感してきました。労働力の担い手として学生の皆さんの力を考えたことはありません。あくまで、人間的出会いと同じテーマで交流する中できつと実現するであろう化学反応を、漠然としてではあります(普通にひととの出会いに求めるように)求めたつもりです。そして、〈さがまちコンソーシアム〉を何度も訪ねたり、知り合いの先生方を訪ねたりと、連携の提案を具体的に行ってきたつもりですが、偶発的に学生さんとの出会いはあっても、ことごとく実ることがありませんでした。本橋さんは、「こちらのアンテナが鈍くて」のような慰めを口にしてくださいました。しかし、それは、思いやりを持っての発言と受け止めざるを得ませんでした。お話を伺ううちに、もっと具体的に保障性をもって、事業の提供、協働を提案する必要があったのではないかと考えるようになったからです。

すなわち、同じ地平で、出会い、ともに作ろうとする、考えようとする、という姿勢だけでは足りない部分があるのではないかと考えました。

そのとき、大学とは何か、学生とはどういう存在か、ということも併せて考えなくてはならないと感じました。この問いに答えるためには、市民としての自分の位置、取り組もうとしている事業がどのような目標をもって位置づけられているかを抜きにはできません。そのような位置づけがあつてこそ、事業の姿もすっきりと見えてきて、「大切な学生の預け先」としての信頼性が得られるのではないかと、本橋さんの説明を伺いながら、自身が本橋さんの立場であつたら、連携申し込みをどう受け付けるかという発想が生まれてきて、こんなふうと考えられたようです。窓口というものがあつて、その窓口を挟んでそのような握手が可能かと考えるとき、自分の市民としての自立も、また問い返されていると感じた次第です。

この日は、春の嵐の夜でした。足元の悪いなかおいでくださった本橋さん、参加者のみなさん、ありがとうございました。